

# 「不易」と「流行」誠実・克己・忠恕

～人生のダブルヘッダーとは・・・～

## 78回生には最後の通心（信）になるかもしれませんね。

17歳で発病したベーチェット病により、27歳で失明。その後、結婚して、子供を産み、盲導犬とともに暮らす奮闘ぶりを綴った作品『ベルナのしっぽ』を出版し、後にテレビドラマ化・映画化もされた郡司なえ氏。絶望の淵にいた彼女を立ち上がらせたのは、ある評論家が記した一つの言葉でした。ではどうぞ…

私にとって見える世界が失われたことは、世界が失われたことに等しかった。ただただ、ベッドの上に縮こまって、何も考えたくなかった。1年6か月の間、私の巣ごもりは続いた。その間、母が私を守る防波堤になってくれた。

「がんばりなさい」とか「そろそろ再起をはかったら」

などといったことは一言も言わなかった。

「いった豆でない限り、かならず芽が出るときがくるんだから。」

母が繰り返し言ったのはその一言だけだった。

そんな生きているのか、死んでいるのかわからないような私の魂を呼び戻すきっかけとなったのは、かつて私が愛読していた雑誌に、ある評論家がお書きになった次の文だった。

「野球の試合にダブルヘッダーがあるように、人生にもダブルヘッダーはある。最初の試合で負けたからといって、悲観することはない。1回戦に素晴らしい試合をすることができたのならば、その試合が素晴らしい分だけ、惨敗して悔しい思いをしたならば、悔しかった分だけ2回戦にかければいい。」

その2回戦は、それまでにどれだけ「ウォーミングアップ」をしてきたかによって勝敗が決まってくる。」

私の2回戦はこれから始まるのだと思った。1回戦とは違って、目の見えない私で戦わなければいけない。だが、1年半という、2回戦を戦う準備をさせてもらった。もうウォーミングアップは十分だと思った。いてもたってもいられない気持ちで東京都の福祉局に電話をかけ、戸山町にある心身障害者福祉センターを紹介してもらった。

目が見えなくなって、何から始めたらいいのかわからない私にとって、まず最初に必要なのは一人で歩けるようになることと、点字を読めるようになることだった。

やっと外界と接触する心の準備のできた私を後押しするように、電話で相談にのってくれた先生がおっしゃった。

「あなたは運のいい人ですね。ちょうど視覚障害者向けのカリキュラムにあきが出たところなのですよ。」

舞い込んできた幸先のよさに喜び勇んで、新しい人生を出発することになった。そんな私の2回戦の試合模様が、『ベルナのしっぽ』という1冊の本にまとまった。こうして、あの空白の1年半から立ち直ってみて思うのは、生きる勇気を失わない限り、私たちはたいていの困難を乗り越えていくことができるということである。

不幸のどん底にいるときには、どこまでも奈落の底に落ちていくのではないかと思えてくる。だがそれをこらえてじっと痛みを耐えていれば、かならず明るい光は見えてくる。その一つひとつの困難を乗り越えていく生きることなのではないかと思う。

そして1試合目がうまくいかなくとも人生には2試合目が巡ってくる。

そのためのウォーミングアップを続けていくことこそが次の一步を踏み出すためにもっと大切のことなのだと思う。

『致知』1998年7月号「致知隨想」より

高校時代って、郡司さんの言う「人生のウォーミングアップ」の時期なのかもしれませんね。

まだ、1回戦も終えていないかもしれない君たち高校生、思い切って一步前に進んでチャレンジしませんか？

